

## Q：里山は自然なのか

A：自然を定義することは難しいと思います。

全くヒトの影響を受けていない空間を自然と定義すると、地球上に自然はありません。ヒト以外の生物が暮らす空間と定義すれば、地球上のいたるところが自然といえます。

つまり、ヒトの影響の度合いに応じて自然の在り方も変わると考えることが、自然を理解するうえで必要です。

例えば、比較的ヒトの影響を受けていない自然（知床や屋久島の原生林、他にも自然林、原生自然環境、極相と色々な言葉があります）もあれば、ヒトの影響を強く受けている、ヒトが積極的に作り出した都市内の緑地、街路樹といった自然もあります。

そのため、生態学的には、ヒノキやスギの植林地、そして二次林（雑木林）などを代償植生と呼び、さらに畑や水田などの耕作地も併せて「二次的自然環境」と呼びます。

里山も定義が難しい空間で、一般的には広く農村的景観（畑、水田、水路、ため池、屋敷林、果樹園、桑畑、社寺林、雑木林など含めた空間）のことを里山と呼ぶようになっています。しかし、本来は植林地と雑木林からなる空間を里山と呼んでいました。つまり、里山を生態学的に定義すると代償植生、あるいは広くとらえると二次的自然環境となります。

このような里山がどのような過程を経てできてきたのか、その過程でヒトがどう関わったのかをきちんと知ることが、これからのヒト社会の在り方、いわゆる「自然（というより生き物でしょうか）と共生するヒト社会」を構築するうえで必要不可欠だと考えます。岐阜県の面積のほぼ81%（そのうちの約90%が里山です）、日本列島の面積の67%（そのうちの約70%が里山）を森林が占める、しかもその大部分が里山であることを踏まえると、里山を抜きにして日本の自然、さらには社会構造、産業構造を考えることはできないと考えます。

だいぶ回り道しましたが、おたずねの件に対しては、「里山も立派な自然です」と回答させていただきます。

**Q：生物多様性についてより深く学びたい場合、大学であればどちらの学部で学べるのでしょうか。**

A：「生物多様性」は自然を考える場合の概念で、遺伝的多様性、種多様性、生態系の多様性が生き物にとって、あるいは生き物を絶滅させないために重要だということを表す言葉です。

より深く学ぶということは、遺伝子レベル、種レベル、生態系レベルのどれかについて知識や方法論を学ぶということだと思います。

その意味では、一般的には理学部、農学部、教育学部で生物多様性について教育を受けることができます。岐阜大学の場合だと応用生物科学部、教育学部、名古屋大学だと理学部、農学部でしょうか。

一方で、学部レベルではなく、教員レベルではいろいろな大学のいろいろな学部で生物多様性に関する教育研究をやっている教員がたくさんいます。

自分の興味あるキーワードで検索してみてください。所属や名前がわかったら、メールなどで直接話を聞いてみるのも良いでしょう。

高校1年生、2年生ならオープンキャンパスに参加して情報を得ることもできます。